

幼児の向社会性の発達

－ 実験室実験と自然観察による検討 －

島 義 弘 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

黒 岩 悠 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

The development of prosocial judgement and prosocial behavior in preschoolers: An experimental study and a naturalistic observational study of prosocial development

SHIMA Yoshihiro · KUROIWA Haruka

キーワード：向社会的判断、向社会的行動、共感、心の理論、他者感情理解

問題と目的

向社会的行動とは、コストの有無や動機に関わらず、他者に何らかの利益をもたらす自発的な行動である (Eisenberg, 2010)。向社会的行動は乳児期から観察され、2歳ごろには他者の苦痛 (泣きの表出等) に対してものを渡したり (分与行動)、なぐさめたり (援助行動) するようになる (Eisenberg, 1992 二宮・首藤・宗方訳 1995; Warneken & Tomasello, 2006; Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982)。このような向社会的行動の発達には役割取得能力や共感性などの社会認知的発達や、親の養育態度や他児との相互作用などの社会化経験が影響することが指摘されている (e.g., Eisenberg, 2000; Eisenberg, Spinrad, & Knafo-Noam, 2015; Hoffman, 2000)。

ところで、向社会的行動の発現には多様な要因が関与しているが、Eisenberg et al. (2015) によると、これらの諸要因の影響過程は3つの段階に分けることができる (Figure 1)。第1段階は他者の要求への注意の段階である。社会認知的発達の程度や社会化経験、相手への好意や関心の程度によって、他者の要求に対する注意の度合いが左右される (Davidov, Zahn-Waxler, Roth-Hanania, & Knafo, 2013)。第2段階は動機づけの段階である。他者の要求に気づいた個人が向社会的行動を起こすか否かについての意思決定をする段階、すなわち向社会的判断の段階であり、原因帰属や共感の影響を受ける (Chapman, Zahn-Waxler, Cooperman, & Iannotti, 1987; 浜崎, 1992; 溝川, 2011)。第3

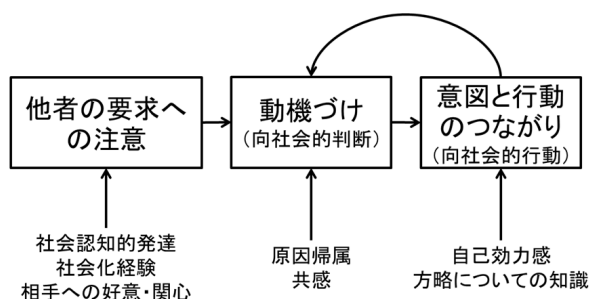


Figure 1. 向社会的行動の生起プロセスモデル (Eisenberg et al. (2015)
を基に作成)

段階は意図と行動のつながりの段階である。向社会的判断が実行に移される段階であり、自己効力感や向社会的行動についての知識の影響を受ける (Davis-Unger & Carlson, 2008)。また、実行された向社会的行動の結果は動機づけの段階にフィードバックされ、将来の向社会的判断に影響を与える。

本論文では、向社会的行動のプロセスモデルのうち、第1段階に影響を与える要因として心の理論と他者感情理解、第2段階に影響を与える要因として共感を取り上げ、これらの要因の個人差が幼児の向社会的判断および向社会的行動に与える影響について検討する。

幼児期において、他者が経験している感情および他者が抱いている意図や信念を理解することは向社会的判断に影響を及ぼす重要な先行要因であると考えられる。前者は他者感情理解、後者は心の理論として概念化されている。他者感情理解は表情や文脈、他者の特性など種々の手掛かりを用いて他者の感情を理解する能力である (森野, 2005, 2010)。また、心の理論は自己および他者に意図や信念、知識、好みなどの直接観察できない心的状態を帰属させる能力である (Premack & Woodruff, 1978)。

心の理論は、その概念が提唱されて以来、数多くの研究がなされており、Wellman, Cross, & Watson (2001) のメタ分析の結果によると、およそ4歳から5歳の間に他者の誤った信念を表象し、それに基づく行動の予測が可能になる。一方、他者感情理解は3歳児でも可能であり (Broke, 1971)、6歳にかけてより多様な情報を手掛かりとして利用したり、複雑な感情を理解したりすることができるようになる (朝生, 1987; 森野, 2005; 島, 2015a, 2016; 吉川・島, 2016)。心の理論は現実生活の中で自他の思いが異なり、他者の心の推測が必要とされる場面を多数経験することによって発達すると考えられており (Chandler, Fritz, & Hala, 1989; 瓜生, 2007)、他者の意図や信念の理解に先立って他者の感情や欲求の理解が進むものと考えられる (東山, 2007; Wellman & Liu, 2004)。実際、他者感情理解に優れているほど心の理論も発達していることが報告されている (島, 2015a; 谷脇・藤田, 2012)。このような、他者の心的状態を理解・推測する能力は他者から発せられる向社会的行動の要請に対する気づきにつながるものと考えられている。

向社会的判断が他者の心の理解とどのように関連するのかを検討した研究として、溝川の一連の研究 (溝川, 2007, 2011; Mizokawa & Koyasu, 2007) や黒岩・島 (2015) が挙げられる。溝川 (2007, 2011; Mizokawa & Koyasu, 2007) は見かけの感情と本当の感情が同じではないことの理解は物体における見かけと本当の区別 (例えば、石のように見えるスポンジが本当はスポンジであると理解すること) よりやや遅れて (Flavell, Flavell, & Green, 1983)、4歳から6歳にかけて発達し、嘘泣き (見かけの泣き) と本当の泣きを区別することのできる子どもの約4割は泣いている他者に対して向社会的行動を取ると語ることを報告している。一方、黒岩・島 (2015) では、心の理論の獲得状況とは関連なく、嘘泣きであっても本当の泣きであっても、泣きの表出者に対しては向社会的行動を取ると判断する子どもが多いことが示された。このような結果の差異の背景には、「泣いている人は助けるべき」という道徳的な規範意識や、泣いている人や状況に対する共感が存在しているものと考えられる。

共感とは向社会的判断に影響を与える要因の1つであり (Eisenberg et al., 2015)、「他者の感情を認知した際に自分自身に生じる代理的感情反応」と定義される (Hoffman, 1977)。他者の窮状を認知した際に、その窮状およびネガティブな感情に対する共感が生起することによって向社会的行動が動機づけられる (Eisenberg, 2010; Eisenberg et al., 2015)。Eisenberg (2010; Eisenberg et al., 2015) によると、他者が困っていることを認知するだけでは必ずしも向社会的行動にはつながらないが、そこに共感が介在することによって向社会的行動の生起確率が上昇する。中でも、個

人特性としての共感性ではなく、状況に対する共感が重要であるという指摘も複数なされている (e.g., Hepach, Vaish, & Tomasello, 2013; Weller & Lagattuta, 2013)。共感そのものは乳児期から認められるが (Eisenberg et al., 2015; Hoffman, 1975), 単なる情動伝染ではなく、自他を区別した上で代理的な感情反応が生じ、かつ効果的な向社会的行動が観察されるのは2歳以降であり、共感性、向社会的行動ともに青年期にかけて発達を続けるとされる (Eisenberg et al., 2015; Hoffman, 2000)。

以上の議論を踏まえて、本論文では幼児期の向社会的判断および向社会的行動の発達とその個人差に影響を及ぼす要因について、実験および観察によって検討することを目的とする。具体的には、研究1では向社会的判断に影響を与えるとされている他者感情理解、心の理論、共感を取り上げ、これらの個人差と向社会的判断の関連を実験場面で検討する。研究2では日常生活の中で生起する向社会的行動を観察し、研究1のデータと照合しながら向社会的行動の個人差について検討する。

研究1

他者感情理解、心の理論、共感が向社会的判断におよぼす影響について検討する。なお、本研究では向社会的判断が規範意識の影響を受ける可能性 (黒岩・島, 2015) を考慮して、向社会的行動を要請する人物が本当に泣いている場合と嘘泣きをしている場合に分けて検討する。仮説は次のとおりである。

他者感情理解と心の理論は向社会的判断の前提となる「他者の要求への注意」に影響する (Eisenberg et al., 2015)。したがって、他者感情理解と心の理論の得点が高いほど向社会的判断がなされる。ただし、本研究では心の理論が獲得されている実験参加者に対してのみ向社会的判断を問う課題を実施するため、他者感情理解の得点が高いほど向社会的判断がなされると予測する (仮説1)。また、共感とは「動機づけの段階」に影響する要因であり (Eisenberg et al., 2015), 泣きの表出者に対する共感が向社会的判断を導く。ただし、向社会的判断は規範の影響も受けるため、本当の泣きの場合には共感しているか否かに関わらず向社会的判断がなされるが (仮説2-1), 嘘泣きの場合には共感している場合に限り向社会的判断がなされるものと考えられる (仮説2-2)。

方法

実験参加者

幼稚園児 89 名 (年少児 20 名, 年中児 35 名, 年長児 34 名) を対象に、個別実験を行った。

課題

誤信念課題 心の理論を測定する課題として、マクシの課題 (Wimmer & Perner, 1983) を改変した課題を紙芝居形式で実施した。主人公 (ウサギ) が知らない間に他者 (ゾウ) の手によって物体 (チョコレート) が移動するというストーリーを聞かせた後に、他者信念質問 (主人公はチョコレートを食べるためにどこを探すか), 現実質問 (チョコレートは今どこにあるか), 記憶質問 (主人公はどこにチョコレートを置いたか) を行った。この3つの質問に全て正答した場合を正答とした (範囲: 0-1)。

他者感情理解 朝生 (1987), 笹屋 (1997) などを参考に課題文を作成した。課題文は2場面の紙芝居形式で、主人公が喜び、悲しみ、怒り、恐れ各感情を経験する内容となっていた。2場面目の主人公の顔は空白となっており、4種類の表情図 (喜び、悲しみ、怒り、怖れ) から主人公の表情を選択することが求められた。4つの課題

文に対する反応の正誤を合計して他者感情理解得点を算出した(範囲:0-4)。なお、各表情図が表している感情が理解されていることが確認できなかった実験参加者(年少児5名,年中児2名)にはこの課題を実施しなかった。

共感および向社会的判断課題 ボール遊び場面とお絵かき遊び場面の2つのストーリーを作成した。それぞれのストーリーに本当の泣きの場合と嘘泣きの場合が用意されている。いずれも、登場人物が実験参加者を見て泣く(ふりをする)という展開の、4場面からなる紙芝居である。その後、行動質問、共感質問、内容確認質問を行った。行動質問は実験参加者が登場人物に対してどのような行動を取るかを問うものであり、3つの選択肢(「A. 遊びに誘う」「B. からかう、バカにする」「C. 何もしない」)から選ばせた。このうち、Aを向社会的行動、BとCを非向社会的行動とした。共感質問は登場人物と実験参加者の感情を問うものであり、前述の4つの表情図から自他ともに「悲しみ」を選択した場合に共感していると判断した。内容確認質問はランダムな反応による正答を除外するため、ストーリーを理解していることを確認するために実施した。2つの内容確認質問に正答したものを分析対象とした。

実験参加者は2つのストーリーのいずれか一方を本当の泣き、他方を嘘泣きの場合として、合わせて2課題に回答した。どちらのストーリーを本当の泣きにするかはカウンターバランスが取られた。なお、この課題は誤信念課題に正答した者に対してのみ実施した。誤信念課題に正答し、かつ内容確認質問にも正答したものは、本当の泣きでは30名(年少児2名,年中児10名,年長児18名)、嘘泣きでは26名(年少児3名,年中児10名,年長児13名)であった。

手続き

誤信念課題、他者感情理解、共感および向社会的判断課題の順に実施した。所要時間は実験参加者によって異なるが、概ね10分以内であった。

結果

誤信念課題の度数分布および他者感情理解の平均値と標準偏差をTable 1に示した。誤信念課題について χ^2 分析を行ったところ、年少児は正答が有意に少なく、年長児は正答が有意に多かった($\chi^2 = 11.60, p < .01$)。また、他者感情理解について1要因の分散分析を行ったところ、学年差が有意であり($F(2, 79) = 6.23, p < .01$)、Bonferroni法による多重比較の結果、年少児よりも年長児の得点が有意に高かった。また、両者の相関も有意であり($r(80) = .29, p < .01$)、他者感情理解得点を説明変数、誤信念課題の正誤を目的変数としたロジスティック回帰分析も有意であった($OR = 1.82 [95\% CI: 1.14-2.91], p < .05$)。

Table 1. 誤信念課題と他者感情理解課題の記述統計量

	誤信念課題		他者感情理解		
	正	誤	N	M	SD
年少	4	16	15	2.07	1.10
年中	16	19	33	2.58	0.94
年長	23	11	34	3.12	0.98

注:誤信念課題の数値は人数

共感と向社会的判断については、本当の泣き、嘘泣きのそれぞれについて他者感情理解得点を説明変数、共感と向社会的判断を目的変数としたロジスティック回帰分析を行った（Table 2）。その結果、本当の泣きにおいて、他者感情理解得点が高いほど共感を示す人が多い傾向が認められた（ $OR=3.08$ [95% CI : 0.85-11.12], $p<.10$ ）。その他、本当の泣きにおける向社会的判断と嘘泣きにおける共感、向社会的判断はいずれも他者感情理解得点によって予測されなかった。

続いて、共感と向社会的判断の連関を検討するため、クロス集計表を作成した（Table 3）。本当の泣きに関しては、誤信念課題に正答し、かつ内容確認質問にも正答したもののうち、行動質問に回答しなかった1名（年長児）と共感質問に回答しなかった1名（年長児）を分析対象外として Fisher の直接確率検定を行った結果、度数の偏りには有意ではなかった。同様に、嘘泣きに関しては、誤信念課題に正答し、かつ内容確認質問にも正答したもののうち、共感質問に回答しなかった3名（年長児）を分析対象外として Fisher の直接確率検定を行った結果、度数の偏りには有意ではなかった。

考察

研究1では、心の理論、他者感情理解、共感性の個人差と向社会的判断の関連を検討した。その結果、心の理論と他者感情理解はいずれも年少から年長にかけて発達すること、他者感情理解に優れているほど他者の本当の泣きに対して共感を示しやすい傾向があること、および本当の泣き、嘘泣きを問わず、また泣きの表出者に対して共感するか否かを問わず、泣きの表出者に対する向社会的判断がなされることが示された。これらの結果は、仮説2-1を支持し、仮説1と仮説2-2を支持しないものである。

このような結果となった主たる要因は、分析対象となった実験参加者の大半（本当の泣きでは89%、嘘泣きでは83%）が他者の泣きに直面した際に向社会的行動を取ると回答したことにある。黒岩・島（2015）が指摘するよう

Table 2. 他者感情理解が共感と向社会的判断に及ぼす影響

	回帰係数	標準誤差	Wald	オッズ比 (95%信頼区間)
本当の泣き				
共感	1.13	0.65	2.96 [†]	3.08 (0.85-11.12)
向社会的判断	0.33	0.59	0.30	1.39 (0.43-4.44)
嘘泣き				
共感	0.99	1.03	0.92	2.68 (0.36-20.04)
向社会的判断	0.01	0.58	0.00	1.01 (0.33-3.16)

[†] $p < .10$

Table 3. 共感と行動の連関（人）

		共感	非共感
本当の泣き	向社会的行動	7	18
	非向社会的行動	0	3
嘘泣き	向社会的行動	2	17
	非向社会的行動	1	3

に、実験場面での向社会的判断に規範意識が影響し、泣いている、もしくは泣いているように見える他者に対しては向社会的行動を取るべきであるとの判断がなされたものと考えられる。同様に、他者感情理解が共感を介して向社会的判断に影響を及ぼすというプロセス (Eisenberg et al., 2015) も、このような回答の偏りによって隠蔽された可能性が考えられる。その一方で、本当の泣きにおいてのみ、他者感情理解が共感の個人差を弱いながらも予測した。他者の感情の理解と共感性の間に正の相関関係があることは山村・辻本・中谷 (2009) でも示されており、本研究の知見はこれと一致する。Table 3 より、嘘泣き場面では他者に対する共感ほとんど認められないが、本当の泣き場面では他者に対して共感を示すものが少数ながら存在することから、他者の感情を理解できることは嘘泣き場面での共感を予測せず、本当の泣きにおいてのみ共感につながる可能性が示唆された。

研究1では、黒岩・島 (2015) と同様、実験場面では向社会的判断の個人差を析出するのが難しいことが示された。そこで、研究2では幼児の日常生活の中で生じる向社会的行動を観察し、研究1で得られたデータと照合しながら向社会的行動の背後に存在する個人差を検討する。

研究2

本研究では向社会的行動の背後に存在する個人差を明らかにすることを目的とする。

研究1では心の理論、他者感情理解、共感を向社会的判断に影響を与える要因として取り上げたが、いずれも向社会的判断との有意な関連は示されなかった。その主たる原因として、規範意識に基づく紋切り型の反応の可能性が推測される。そこで、研究2では自然観察によって、幼児が社会的場面で向社会的行動を示すのか否か、また、その際に研究1で検討された諸要因がどのように関わるのかを検討する。具体的には、幼児が他者に向社会的行動を要請するようなシグナルを発しているときに、その幼児の周囲にいる他者がそのシグナルに気づくか否か、またシグナルに気づいた際に向社会的に振る舞うのか否かを記録し、これらの個人差が研究1で得られたデータとどのように関連するのかを検討する。

方法

観察対象者

幼稚園児91名 (年少児20名、年中児36名、年長児35名) を対象とした。各学年から1名を抽出し (年少児:X, 年中児:Y, 年長児:Z)、その抽出児の周囲で生じる社会的行動をビデオで撮影した。

手続き

学年ごとに、2—3日にわたってビデオ撮影を行った。合計の観察時間は約5.5時間から6.5時間であった。

観察項目は、(1) 向社会的行動要請シグナルの有無、(2) 「有」の場合、そのシグナルは誰に向けられたものか、(3) シグナルを発した幼児の周囲にいる他児はシグナルに気づいたか、(4) シグナルを発した幼児の周囲にいる他児の行動は向社会的行動であったか否か、(5) 向社会的行動要請シグナルが明確でなかった場合でも向社会的行動が生じたか、であった。

記録されたビデオの約3分の1について、第2著者と心理学を専攻する大学院生1名が個別にコーディングを行った。不一致については協議を行い、合意を得た。残りのビデオは第2著者が単独でコーディングを行った。

結果と考察

観察時間中に向社会的行動要請シグナルが「有」と判断されたエピソード、および「無」であっても向社会的行動が生じたエピソードは、年少児は1事例、年中児は3事例、年長児は7事例あった。各学年で観察されたエピソードのうち、特徴的なものをTable 4, Table 5, Table 6に示した。また、各Tableに示されなかったものも含めて、観察されたすべてのエピソードに登場する人物の研究1における結果をTable 7に示した。以下、学年ごとに考察を加えていく。

年少児

年少児のエピソード (Table 4) において、抽出児Xのシグナルに気づいたAはXを見るものの、何もしなかった (非向社会的行動)。一方、同じ場面にいたBはシグナルに気づいた様子は見られなかったものの、Xが要求するものと類似したものを渡した (向社会的行動)。

Bの行動は、年少児であっても言語的に、明確に向社会的行動を要請されれば実行することが可能であることを示している。Eisenberg (1992 二宮他訳 1995) は3歳以降、要求されるとそれに応じて分与行動が生じるとしており、本研究の結果はこれを支持している。その一方で、AはXに対して向社会的行動を取らなかった。Aは他者感情理解得点も高く、心の理論も獲得していたが、実験場面で泣きに対する共感が見られず、向社会的判断もしていなかった (Table 7)。Aは遊びを継続中であり、Bは片付けに入っていたことも関連している可能性はあるが、実験場面で他児に対する共感が認められず、向社会的判断もしていない幼児は現実場面でも向社会的行動を取りにくいという対応関係が認められた。

ただし、年少児は向社会的行動を要するエピソード自体が少なかつたため、より多くの事例を基に検討する必要がある。

年中児

年中児においては、年少児と同様、言語的に、明確に向社会的行動を要請されれば実行することが可能である。一方、Table 5に示したエピソードでは、抽出児Yが「痛い」と苦痛を表明しているが、向社会的行動の要請は明確ではない。このシグナルに対して、近くにいたP・QはYを見るものの、Yに対して行動を起こさなかった (非向社会的行動)。

年中児のエピソードに登場した人物は抽出児を除いて心の理論が獲得されていなかったため (Table 7)、実験場面との対応を検討することはできなかったが、年中児は明確な援助要請があれば向社会的行動を取るが、援助要請があいまいな場合は向社会的行動を取らないことが一貫して観察された。

Table 4. 年少児のエピソード

人物	発話、行動など	分類
X	先生の近くに行く	
先生	「ん？」	
X	Aの粘土箱の中にあるものを指さし、「あのウサギかわいい」	
先生	うなずくが、他の幼児に関わる	
X	Aの後ろに立ち、「すみませーん」と声をかける	シグナル
A	振り返ってXを見る	シグナルへの気づき
X	「そのウサギさんみたいなのかっていいですか」	シグナル
A	前を向きなおし、何もしない	非向社会的行動
B	「はい」 (片づけを始めていたBが自分がつくったウサギを渡す)	向社会的行動
X	ウサギを受け取り、先生のもとに行く	

Table 5. 年中児のエピソードの一例

人物	発話、行動など	分類
	YがP, Qの近くで給食時のエプロンを着ている	
Y	頭を通したときに顔にひっかかり、「痛い」と言いながら顔を押さえ、周りをみる	シグナル
P・Q	動きを止めてYを見る	シグナルへの気づき
P・Q	何も言わず、自分の着替えをする	非向社会的行動
Y	「痛い痛い、いひやひやひや」と言った後、何もなかったかのように着替えとおしゃべりに戻る	

Table 6. 年長児のエピソードの一例

人物	発話、行動など	分類
U	Zのいるグループの机に近づき、「わかんない人」と問いかける	向社会的行動
Z	「はい」と手を挙げる	シグナル
U	「ちょっと待ってね」と言い、他の子の作業を手伝う	
Z	Uを呼ぶ	シグナル
U	Zが座っている横に立ち、Zの画用紙をとって折る	シグナルへの気づき
U	「ここにのりつけて」とZに教える	向社会的行動
Z	言われたところにのりをつける	
U	他児に遊びに誘われるが、「ちょっと待って」と言い、Zの様子をみる	向社会的行動
不明a	「U, U, 不明bにこれ教えてあげて」とUに頼みに来る	シグナル
U	「もう大変なんだけどー」と周りを見渡ししながら言う	シグナルへの気づき
U	対象児Zがのりをつけ終わったのを見て、その部分を貼りつける	向社会的行動
U	「あとはここ」とつぶやきながら、残っている部分を触る	向社会的行動
不明c	「もうお片付けの時間」	
U	Zに教えるのをやめ、どこかに行く	

Table 7. 研究2で観察されたエピソードに登場する人物の研究1のデータ

人物	他者感情 理解	心の理論	本当の泣き		嘘泣き	
			共感	行動	共感	行動
年少児						
X	—	×	—	—	—	—
A	3	○	×	×	×	×
B	—	×	—	—	—	—
年中児						
Y	3	○	○	○	×	○
O	1	×	—	—	—	—
P	3	×	—	—	—	—
Q	2	×	—	—	—	—
年長児						
Z	3	×	—	—	—	—
R	2	○	×	○	×	○
S	—	—	—	—	—	—
T	4	○	×	○	×	○
U	4	○	○	○	×	○

注1:「—」は課題を実施しなかったことを表す

注2:「心の理論」の○×は誤信念課題の正誤を表す

注3:「共感」の○×は共感の有無,「行動」の○×は向社会的行動か否かを表す

年長児

年長児においては、明確なシグナルが発せられた場合にはそれに対する反応が生じた。しかし、観察されたエピソードが制作活動における教授を乞うものであったため、知識や技術があれば教える・援助するという向社会的行動が取られたが、知識・技術が不足している場合には「わからない」という非向社会的な反応となった。また、自

分の作業が終わってから援助するというような、優先順位を付けた行動や、他の活動（遊び、片付け等）の重要さと比較して向社会的行動を取るか否かが決定される様子も観察された。さらに、明確なシグナルがなかった場合でも、手順を間違えている他児に気づいた幼児が自発的に向社会的行動を起こす様子も観察された。

Table 6 には、他児からの働きかけによって向社会的行動を要請するシグナルを発生し、向社会的な相互作用が展開するエピソードを示した。U は自ら援助を必要としている他者を探し、Z の求めに応じて向社会的行動を取っている。途中で他の幼児からの援助要請や遊びへの誘いが入るが、先に関わっていた Z への援助を優先している。しかし、不明 c の「お片付けの時間」という発言を受けて、Z に対する援助を終了した。このような U の行動は、片付けという幼稚園生活におけるルールが Z への援助よりも優先されるという判断に基づくものであると考えられる。

年長児ではその大半が実験場面向社会的判断をしていることに加えて、心の理論の発達も相まって、援助要請が不明確であっても多くの場合に向社会的行動は生起するが、特に実験場面で泣いている他者に共感を示した U は主体的に向社会的行動を取っていた。年中児の Y は向社会的行動の受け手としてのエピソードのみが観察されたため、主体的な向社会的行動の生起に共感がどのように関わるのかについては更なる検討が必要であるが、年長児において観察されたエピソードは共感が向社会的判断、ひいては向社会的行動に影響を及ぼすという Eisenberg et al. (2015) の主張 (Figure 1) に沿うものである。また、心の理論が成立していた幼児の向社会的行動は文脈に即した効果的なものであったのに対して、心の理論を測定することのできなかった S の行動は向社会的ではあるものの他の幼児とは異なる方略を取っていた。心の理論が発達しているほど教示方略が増え (Davis-Unger & Carlson, 2008)、より適切な教示が可能になることが指摘されているが (木下, 2015)、年長児の結果は少なくとも心の理論が成立していた幼児においてはこれらの指摘を裏付けるものとなっている。

総合考察

本論文では、実験場面および自然場面での幼児の向社会的判断・行動について検討した。その結果、研究 1 では向社会的判断の先行要因であると考えられる心の理論と他者感情理解は幼児期を通して発達し (Table 1)、他者感情理解は本当の泣き場面における共感と関連するものの (Table 2)、共感はずしも向社会的判断を導くものではなく、共感の有無に関わらず泣いている他者に対しては向社会的に振る舞うと半ば自動的に判断していることが示唆された (Table 3)。その一方で、研究 2 では年少から年長にかけて、向社会的行動の要請が明確な場合にのみ向社会的行動が生起する段階から (Table 4, 5)、向社会的行動の要請が不明確であっても、時には自発的に向社会的行動が生起する段階へと移行していく様子が観察された (Table 6)。また、年長児では明確な援助要請があっても、他の選択肢との兼ね合いで必ずしも向社会的行動が生起するわけではないことも示された。研究 2 で観察されたすべての幼児について研究 1 のデータが得られているわけではないため、明確な結論は留保せざるを得ないが、他者感情理解や心の理論の発達と相まって、他者の置かれている状況や経験している感情を理解・推測することによって、その困窮状態に対して向社会的行動が取られる可能性が高まることが示唆された。同時に、その向社会的行動の生起には行動の切り替えや複数の選択肢の中から場に即した判断をするための、自己制御 (実行機能) の発達も影響する可能性が示唆された。自己制御 (実行機能) については本論文では扱っていないため、今後の検討課題としたい。

以上のことから、本論文は幼児期の向社会的性の発達について、その発現プロセスの一端を明らかにしたものと考えられる。ただし、黒岩・島 (2015) と同様、研究 1 の結果からは共感と向社会的判断・行動がどのように関わっ

ているのかは依然として不明である。Eisenberg et al. (2015) のモデルの検証も含めて、今後の検討課題である。

最後に、本論文の知見と幼児教育との関連について、道德の観点から述べていく。島 (2015b) は、高い道德性を備えている幼児ほど約束を破った際に嘘をつくことが報告されていることから (Talwar & Lee, 2008)、子どもが単に知識あるいは価値基準として道德性を身につけるだけでは不十分であり、嘘や謝罪など他者の心に働きかける行為が子ども自身の感情や自他の関係性に及ぼす影響を体験的に学ぶ必要があることを指摘している。その一方で、人は乳児期から道德に関する基本的な理解をしており、妨害者よりも援助者を選好すること (Hamlin, Wynn, & Bloom, 2007; Kanakogi, Okumura, Inoue, Kitazaki, & Itakura, 2013)、18 ヶ月児が他者の目標達成のために援助行動を行うこと (Warneken & Tomasello, 2006) など、人が生来的に道德的・向社会的な存在である可能性が示されている。ここに本論文の知見を加味すると、幼児期の中ごろに自我の発達によって一時的に他者への配慮が抑制される時期を経て、自他の思いを調整しながら必要に応じて向社会的性を発揮できるようになるという発達プロセスを描くことができる。この際、幼児期の初期には十分に自己発揮させ、他者との衝突も経験することが自他の差異を表象することにつながり、他者の心の理解と自己制御能力の発達に伴って、自動的な道德性の発露から統制的な社会行動としての道德性の発現へと移行していくのではないだろうか。

引用文献

- 朝生 あけみ (1987). 幼児期における他者感情の推測能力の発達—利用情報の変化— 教育心理学研究, 35, 33-40.
- Broke, H. (1971). Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 263-269.
- Chandler, M., Fritz, A. S., & Hala, S. (1989). Small-scale deceit: Deception as a marker of two-, three-, and four-year-olds' early theories of mind. *Child Development*, 60, 1263-1277.
- Chapman, M., Zahn-Waxler, C., Cooperman, G., & Iannotti, R. (1987). Empathy and responsibility in the motivation of children's helping. *Developmental Psychology*, 23, 140-145.
- Davidov, M., Zahn-Waxler, C., Roth-Hanania, R., & Knafo, A. (2013). Concern for others in the first year of life: Theory, evidence, and avenues for research. *Child Developmental Perspectives*, 7, 126-131.
- Davis-Unger, A. C., & Carlson, S. M. (2008). Development of teaching skills and relations to theory of mind in preschoolers. *Journal of Cognition and Development*, 9, 26-45.
- Eisenberg, N. (1992). *The caring child*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- (アイゼンバーグ, N. 二宮 克美・首藤 敏元・宗方 比佐子 (訳) (1995). 思いやりのある子どもたち 北大路書房)
- Eisenberg, N. (2010). Empathy-related responding: Links with self-regulation, moral judgement, and moral behavior. In M. Mikulincer & P. R. Shaver (Eds.), *Prosocial motives, emotions, and behavior: The better angels of our nature* (pp. 129-148). Washington DC: American Psychological Association.
- Eisenberg, N., Spinrad, T. L., & Knafo-Noam, A. (2015). Prosocial development. In M. E. Lamb & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of Child Psychology and Developmental Science* (7th ed.). Vol. 3. (pp. 610-656). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1983). Development of the appearance-reality distinction. *Cognitive Psychology*, 15,

95-120.

- 浜崎 隆司 (1992). 共感的状況における幼児の向社会的判断と理由づけ. *心理学研究*, 62, 364-368.
- Hamlin, J. K., Wynn, K., & Bloom, P. (2007). Social evaluation by preverbal infants. *Nature*, 450, 557-560.
- Hepach, R., Vaish, A., & Tomasello, M. (2013). Young children sympathize less in response to unjustified emotional distress. *Developmental Psychology*, 49, 1132-1138.
- Hoffman, M. L. (1975). Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, 11, 607-622.
- Hoffman, M. L. (1977). Empathy, its development and prosocial implications. In C. B. Keasey (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*. (vol. 25, pp. 169-217.), Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Kanakogi, Y., Okumura, Y., Inoue, Y., Kitazaki, M., & Itakura, S. (2013). Rudimentary sympathy in preverbal infants: Preference for others in distress. *PLoS ONE*, 8, e65292.
- 木下 孝司 (2015). 幼児期における教示行為の発達：学習者の熟達を意図した教え方に注目して. *発達心理学研究*, 26, 248-257.
- 黒岩 悠・島 義弘 (2015). 嘔泣きと向社会的行動の関連—心の理論に着目して—. *鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要*, 24, 197-203.
- 溝川 藍 (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解の発達. *発達心理学研究*, 18, 174-184.
- 溝川 藍 (2011). 4, 5 歳児における嘔泣きの向社会的行動を引き出す機能の認識. *発達心理学研究*, 22, 33-43.
- Mizokawa, A., & Koyasu, M. (2007). Young children's understanding of another's apparent crying and its relationship to theory of mind. *Psychologia*, 50, 291-307.
- 森野 美央 (2005). 幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連. *発達心理学研究*, 16, 36-45.
- 森野 美央 (2010). 幼児期における感情理解. *心理学評論*, 53, 20-32.
- Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526.
- 笹屋 里絵 (1997). 表情および状況手掛かりからの他者感情推測. *教育心理学研究*, 45, 312-319.
- 島 義弘 (2015a). 他者の感情の理解と心の理論の関連. *日本発達心理学会第26回大会*.
- 島 義弘 (2015b). 幼児期の葛藤抑制の発達と“思いやりの嘘”. *鹿児島大学教育学部紀要 (教育科学編)*, 66, 85-96.
- 島 義弘 (2016). 幼児の実行機能と他者感情理解. *日本教育心理学会第58回総会発表論文集*, 495.
- Talwar, V., & Lee, K. (2008). Social and cognitive correlates of children's lying behavior. *Child Development*, 79, 866-881.
- 谷脇 のぞみ・藤田 尚文 (2012). 幼児における「心の理論」課題, 他者感情理解と表情理解の関連について. *高知大学教育学部研究報告*, 72, 109-123.
- 東山 薫 (2007). “心の理論”の多面性の発達—Wellman & Liu 尺度と誤答の分析—. *教育心理学研究*, 55, 359-369.
- 瓜生 淑子 (2007). 嘘を求められる場面での幼児の反応：誤信念課題との比較から. *発達心理学研究*, 18, 13-24.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2006). Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311, 1301-1303.

- Weller, D., & Lagattuta, K. H. (2013). Helping the in-group feels better: Children's judgements and emotion attributions in response to prosocial dilemmas. *Child Development*, 84, 253-268.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.
- Wellman, H. M., & Liu, D. (2004). Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development*, 75, 523-541.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 山村 麻予・辻本 耐・中谷 素之 (2009). 幼児期における実行機能と他者感情理解および共感性との関連 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 535.
- 吉川 詩織・島 義弘 (2016). 幼児期の悲しみと怒り感情の区別と心の理論—故意性の理解に着目して— 日本発達心理学会第27回大会発表論文集, 555.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982). The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior* (pp. 109-137). New York, NY: Academic Press.

付記

本論文は、第2著者が鹿児島大学大学院教育学研究科に提出した平成27年度修士論文にデータを追加して第1著者が再分析・再構成したものである。本論文の作成に当たり科研費(15K17276)の助成を受けた。実験にご協力いただいた幼稚園の子どもたちと先生方、および鹿児島大学大学院教育学研究科修士課程の狩集愛香さん、鹿児島大学教育学部卒業生の今村梓さん、吉川詩織さん、鹿児島大学教育学部の大迫由佳さん、花牟禮淑乃さん、山門祥弥香さんに感謝申し上げます。